

Title	日本經濟典籍考(瀧本誠一著, 日本評論社版)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.153(661)- 154(662)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は除外せられ、また中原にも屯田的に此集團が移住し、保護され  
じこと、結局文弱、怠慢に流れ、衰頹し、金は傭兵により國家を  
防禦せざるべからざるに至り、ついに滅亡したる経緯を詳述して  
なる。

幸島曉氏の「金聖歎の生涯とその文藝批評」は、極めて文藝的に  
この批評家の哀しき一生を叙し、讀者の涙をそそつてをる。單な  
る考證家の至り得ざる才氣走つた一篇である。

以上は「朝鮮支那文化の研究」のごく片鱗を紹介したに過ぎな  
い。建設日なほ淺くして内容充實した此論纂を生んだ京城大學文  
學部に敬意を表し、編輯者、田保橋漢氏の勞苦に感謝して筆をお  
く。(松本信廣)

## 日本經濟典籍考

(瀧本誠一著  
日本評論社版)

舊籍の出版及びその解説の學問の進歩に大なる貢獻のあること  
は言ふまでもないことである。我々の研究上の困難はこの點に存  
することが大である。特に徳川時代の書物の如きは多くは、寫本  
として傳り、又出版されたものであつても謂所珍本となつて我々  
は容易に之を手にすることが出来ず、且つその解題が十分でない  
爲に澤山の本の中よりその研究上に必要な本を選ぶことが困難  
である。若しもこの舊籍の出版及び解説が充分行はれる様になれ  
ば我々の研究上の一大困難が除去されることとなるのである。

瀧本博士はすでに日本經濟叢書正續篇を刊行して我が學界に大  
なる貢獻をなし、更らに又日本經濟大典を刊行しつゝあるのであ

る。

本書は博士がかゝる大事業をなしつゝあるかたはらなされたる  
書籍の解説であつて何れも徳川時代の政治經濟に關するものであ  
る。本書に載せられた典籍は先に編纂された日本經濟叢書正續篇  
に所載されたものを主とし、其他博士の文庫中に現在する數百  
部の書中重だつたもの數部を撰擇し解説したものであつて、明治  
初年に編著せられたものは、他日別に近代のみの部を編成さるゝ  
意向を有せらるゝので、未だ刊行されない一二のものを加へ、他  
は一切之を省かれたのである。而して本書に所載された典籍は殆  
ど全部新に刊行されつゝある日本經濟大典に收められたものであ  
る。徳川時代の著作特に經濟上に關する記事論説は、概れ種々雜  
多な問題を一書の中に論じてゐるので、内容に依てこれを分類す  
ることは反つて混雜を來す爲に、博士は内容に依る分類法を取ら  
ず、又徳川時代の著作は、何れも祕密にされ多くは寫本で傳へら  
れ、著者の名も年代も不明のものが多い爲めに、その書目排列の  
順序は著作や出版の年代又は著者の前後に依ることも不可能であ  
る。それ故に博士は新古前後に拘らず解説をほどこしたものを排  
列されたものである。然し本書はその性質上、順序を追ふて初め  
より通讀すべきものでないからして、我々は卷首に添へてある精  
密な書名索引及び著者名索引に依つて、自分の必要とする書の内  
容を知ることが出来るのである。

而して本書に於て解説をなされてゐる典籍の數は實に三百六十  
五種、著者の數は二百二十六人に上るのであつて、之を見ても  
本書が徳川時代の政治經濟典籍の解説者としての價値を知ること

が出来ると思ふ。兎に角、讀書子の座右に缺く可からざる良書たることは疑ない。(今宮 新)

### 綜合經濟史 (加藤繁譯) (大澤閣發行)

米國屈指の經濟史専門家であるグラス教授の [An Introduction to Economic History] が、今回支那經濟史の權威加藤博士によつて邦譯されるに至つたことは、學界のため定に祝福すべき事といはなければならぬ。著者は舊にミネソタ大學で經濟史の教授を勤め、後ハーバート大學の商業史の教授に轉じ、現に其の職に在る人である。原著は其の専門の學殖に教授の經驗を加へ、大學の教科書として、一般の讀物として、且又、ハーバー歴史叢書の一として、一九二二年刊行されたもので、其の論及の對象は原始人民から現時の最高文明國に亘つてゐる。而して本書の目的は、著者の言の如く、經濟史の編年的詳述ではなくして、寧ろ經濟發達の段階を取扱つた總括的序説を行ふにある。即ちかゝる見地から著者は人類の未だ定住しない時代の經濟狀態を採取經濟、農牧遊動經濟とし、定住した後の其れを村落經濟、都市經濟、大都市經濟とし其の發達の過程を五段階に分つてゐる。

第一章採取經濟に於て、著者は採取狀態にある民族に共通な諸多の特質を述べてゐる。

第二章農牧遊動經濟に於て、著者は此時代には人間の仕事の種類が殖え、彼等の時間の全部が日々の食物を得ることに費されなくなり、従つて製造、交易、戰爭に使はれる時間が増してきた。

とを述べ、此時期の人類の特徴として三つの經濟的慣習が擧げられる。(一)植物か動物の一方又は兩方を養育したこと、(二)彼方此方と移動したこと、(三)飼育培養の傍ら採取的の仕事をしたこと、此の三つであると云つてゐる。

第三章定住村落經濟に於て、漸進的にまた造り勝に、農牧遊動民が土地に定住するに至つたことを記し、次に村落の形態、定住村落經濟第一期である自由村落及び第二期である從屬村落について述べ、最後に傑出せる社會團體である都市的村落について叙してゐる。

第四章都市經濟に於て、先づ都市と村落の對抗につき記し、次に都市の形態、前期の都市ともいふべき商業都市、後期の都市ともいふべき商工都市につき述べ、最後に都市の文化的進境に於て「何と言つても都市經濟の一切の業績中、最も著大なものは個人主義の開發であつた。個人主義は自己保存といふ幼稚な形に於て夙に存在したのであるが、今や都市に於て、夫は自己表現を、即ち最も善く自己の生活を生きることを意味するに至つた。此の主義は都市と共に生長したといふよりも寧ろ都市の裡から發育したのであつて、初期都市よりも多く後期都市の方に見出される云々」と叙してゐる。

第五章大都市經濟——主として英國に於ける、第六章大都市經濟——主として米國に於ける——に於ては著者は明快に其の組織を論述し此の一段階を立てて、現代の經濟を説明することの妥當なることを主張してゐる。

要するに、本書は米人の著はした經濟書、地理書によく見るや